スーパーロボット対戦J　アナザーワールド

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スーパーロボット対戦Ｊ　アナザーワールド

【Ｎコード】
Ｎ９３６２Ｘ

【作者名】
アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】
これはもしも統夜とカティア　メルア　フェステニアが家族で３人娘が統夜にメロメロで統夜が苦労人という設定だったらどうなるのか？
そんな思いから書きます

姉と妹達がブラコンで大変です

ピピピ、ピピピ、ピピｐ　ッペシ
目覚ましを止めてから起きる

「ふわぁぁ・・・」

大きな欠伸をかくするとダダダダっと足音が・・・

「まさか・・・」

バダン！！ドア壊れんばかり開いた

「統夜～！！！！！！！！！！」

そう言って抱きついてくるのは
首筋まで届くかと言うまで伸びた美しい黒髪を靡かせ
実ったメロンを押し付けてくる俺の姉
カティア・紫雲だ

「ちょ！姉さん！！離れてって！」
「だ～め♪今統夜分を摂取中なの♪」
「毎日の事だけど統夜分って・・・」

我が姉カティアは極度のブラコンであり毎日最低７時間
統夜と接触し統夜分を摂取しないと力が入らずに倒れてしまうのだ
するとドアが再び開いた

「お兄ちゃ～んおはｙ・・・」

「兄さ～んおはｙ・・・」

そこに居たのは俺の二人の妹
フェステニアとメルアがいた

「お姉ちゃん！！！お兄ちゃんに何やってるの！！？」
「何って？抱きついてるの♪」
「「ずるいよ！！！私も！！！」」

と言って真正面には姉
両サイドから妹に抱きつけれる俺・・・

「あのさ・・・弁当と朝ごはん作らなきゃいけないんだけど・・・」
「そんなの後々♪」
「お兄ちゃん／／／／／／／／いい匂い／／／／／／／／」
「ああ・・・洗い立ての布団より気持ちいい／／／／／／／／／／／／」

・・・俺は女難が途轍もなく高い
なぜなら姉と妹達が凄まじいまでのブラコンで
姉は高校２年
妹達は中学３年だが
未だに俺と結婚すると言っている

「いい加減に離れなかったら・・・俺
皆の事嫌いになるよ？」

俺がそういうと３人は身体を震わせ涙を流す

「ごめんよぉぉぉ・・・お願いだよ統夜ぁぁぁ・・・」
「私を嫌いにならないでよぉぉぉ・・・」

「ごめんなさいごめんなさい・・・」

「判ってくれたら良いよ」

俺は3人から離脱し弁当と朝ごはん作りに着手する

親友

俺は姉さん、妹達と共に家を学校に向かった
・・・が問題あり
妹に両サイドから腕をつかまれ
姉さんは流石に抱きついたりしないのが救い
そんな時・・・

「おおい！統夜！」

背後から俺の名を呼ばれたので後ろを向くと
長い金の髪にエネラルドのような目を持ち
女の子と手を繋いでいる俺の親友がいた

「よお、黒斬、百春ちゃん」
「おはよう・・・ございます・・・」
「相変わらずラブラブだな」
「冗談はやめてくれマジで笑えん」

こいつは暗闇（やみの）　黒斬（こくざん）
俺の苦労を知る大親友
あだ名は死神ダークネス
不吉にもほどがある
由来は剣道の授業で元全国チャンプであった先生を瞬殺したからだ
って言うか俺と黒斬にとっては剣道は遊びみたいなもん
俺達がやるのは剣術だからね
こいつは父と母の両方から美しい金髪と瞳を受け継いだ
背も高い
それ故に極稀に女性に間違えられる

それを本人はかなり気にしている
髪を切ろうとしたが何時も百春ちゃんに止められるらしい
がそれを振り切って切ったみたが1ヶ月もしない内に元通り
しかもある程度伸びたら底で伸びなくなる
だからもう髪を切るのを諦めている
ついで女性から恐ろしいほどモテる
見ず知らずの人から告られるほど
俺が通っている高校と同じだが校内人気同一1位を誇る
・・・え？同一1位のもう一人って誰かって？
・・・言いたくないけど俺だ・・・

さて次は百春ちゃんだ
暗黒（やみの）　百春（ももはる）
彼女はフェステニアとメルアが通う中学校と同じ所に通っている
俺の妹同様に兄である黒斬にベタベタ
がフェステニアとメルアとは違い彼女は少し内気な性格で控え気味
俺の妹もそんな感じならまだ良いんだが・・・
はあ・・・

「おいさっさと行こうぜ」
「そうだな」

俺と黒斬は妹達を送り届けて高校に向かった

色んな意味史上最強コンビ！？

俺は黒と共に下駄箱に到着した

「そうかカティアさんも相変わらずだな」

「そうなんだよもっとお淑やかならいいのに・・・」

そう言って下駄箱の扉を開けるとドササササッ！！！

大量の手紙が落ちてきた

全てが

『統夜君へ』　『紫雲君へ』

『黒斬君へ』　『暗黒君へ』

という物世間的に言うラブレターというものだ

「・・・お互い増えたなぁ」

「ああ・・・」

靴を履き替えながら落ちた手紙を拾う

「ひいふうみい・・・１０通だ」

「俺もだ」

「黒、お前は百春ちゃんだから自由恋愛はできるだろう？」

「何を言うアイツの前で恋愛なんてしてみろ、包丁で胸を刺されるぞ」

「マジで？」

「ああ・・・そう言ってた・・・そう言うお前はどうなんだよ？カティアさん達とは

義理の姉と妹だろ？」
「まあなだけど姉と妹、弟だぞ？」
「その割にはいつもいつも童貞を奪われそうになってるよな？」
「う・・・」
「それより教室行こうぜ」

俺達は2階の教室に向かい席につく
すると・・・

「ヴォオオイ！！死神！！紫雲！」

ドォォォン！！っという音と共に教室のドアが開いた

「うるさいな・・・カスが・・・」
「目障り・・・」
「ぐはぁ！！」

いきなりの罵倒で膝をつく

「紫雲！死神ぃぃ！！」
「「うるせえ！！！」」

近くにあったモップを投げつけ顔面に棒の部分が炸裂した

「ぐほぉっぉぉ！！！！！！！！！！！！！」
「「「「お～　パチパチパチパチ」」」」

クラスの女子、男子から拍手を浴びる

「さっすがぁ！！紫雲君と斬くんだよねぇ～！」

「うんうん！」
「それに紫雲のお姉さんはこの学校のアイドル！カティア先輩だもんねぇ～！！」
「うんうん羨ましいよねぇ～」
「それに妹さんのフェステニアちゃんとメルアちゃんのお兄様だし！」
「はあ～私も妹になりた～い」
「百春ちゃんも羨ましい」
「ああそうだなあんな格好良くて優しい兄貴が居て幸せだろうなぁ」
「はあ・・・俺も優しい兄貴が欲しいぜ・・・」

何て事を言われている・・・
因みに俺と黒は剣道で全国1位
柔道1位、空手1位その他諸々1位
そんなどうでもいい記録を作ったためか挑戦者が絶えない
へ？勉強？どうかしましたか？
全国模擬同一で俺と黒で1位
学校のテストも全科目満点ですけど何か？

「なあ黒・・・」
「なんだ？」
「俺達って・・・バグキャラか？」
「・・・嫌バグチートキャラだ」
「更に酷くなってるじゃね～か、当たってる気はするが・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9362x/

スーパーロボット対戦Ｊ　アナザーワールド

2011年11月10日18時07分発行